

皆んなで選んだ
今月の秀句

群がればみな保菌者の顔に見え
黒い雨晴れ間与えぬ国の所作

小山 広助
遠田 亀公子

記録が
残っていない

とよーなりーっ



偉大なソーリの
8 年間の業績を
讃えたいけど

【主張するネコたちのこと】シェアもコピーも自由です

突然の 安倍総理辞職表明

facebook のネコたちもあきれている。総裁選で候補者の誰も「負の遺産」を正すとは言わない。まして本命スガは安倍政治を継承するという。ネコたちも安心して眠れない。ネコたちと一緒に川柳の出番です。

感染拡大が続く。どこにでもウイルスがウヨウヨ。やさしく現代を切り取る一句が見事。広島に降った黒い雨の裁判。被爆者が勝訴。国は「黒い雨」を否定し広島県・市に圧力、控訴を余儀なくさせた。地方自治も踏みにじる国の所作。(周)

例会案内

9 月例会
投稿締切
課題「前」
自由吟
自選句、自解筆もよろしく。

9月24日(木)
21日(月)
3句以内
5句以内

◆ 目次

川柳互選・課題吟「群」	2
自由吟	3
自選句・おたより	5
ほのぼの川柳	6
立入川柳	6
戦争前夜抄 ②〇《甘粕事件》	6
大杉栄、伊藤野依殺害	6
「シベリア抑留記」を終えて	12
長女・坂本富沙子さんより	16
編集後記を兼ねて	16

8月の 川柳互選

◆課題吟「群」

一人 3句以内吐

(投句13人／14人の互選)

4	群青の帯でリモート盆花火	白眞弓
4	カルガモや よちよち歩き 親子群れ	宏
3	三密を避け靖国に群れる議員	徹乗
3	足腰に声かけ明日は群を出る	ダン吉
2	人の群れ三密という情けなや	一角
2	コロナの群れ頭の中に一日中	未知子
2	声をあげ群れをなして倒したい	高坊
2	天皇万歳という群衆心理にドン引きす	徹乗
1	100条を守れぬ百人の証人席	立東爺
1	六十番悪ばかり晋三とツーショットの群れ	大峰
1	昨日今日群れているかな自民党	一角
1	群の中たったひとりの目が光る	ダン吉
	見物人そんな顔して群れている	ダン吉
	サンマ群れ 史上不漁 値は高かし	宏

4	招待は60番からです群れサクラ	立東爺
4	経済をまわせば群がるコロナ禍	広助
4	新型コロナ群れて安心に忍び寄る	未知子
5	ランプで息吹き返すKKK	立東爺
5	化けの皮はがれて騒ぐアベ一群	林
5	飽食に群れた都会の骸たち	亀公子
5	靖国に群がり飛び立つ敵基地へ	林
5	退陣で有象無象が群れている	一角
5	死に水はコロナ飛沫か群で居る	大峰
5	自民にみる利益をむさぼる症候群	高坊
6	コロナ悲し群れて遊ぶは子の慣 なづかい	未知子
6	あの日より官邸参りの群れが消え	白眞弓
6	反戦という異論を叩く群れる民	徹乗
6	コロナ禍で子の群れどこへ行つたやら	白眞弓
7	アイアール早くもタイホシヤ群れをなし	北の山
7	アベの群れ 野心の正体 靖国派	宏
8	憲法無視もみんなで渡ればこわくない	北の山

9	終戦日大臣靖国群れて行く	北の山	2	マヨネーズうちなんちゅうの魂なり まぶい	白眞弓
10	失職の群れで膨らむコロナ都市	亀公子	2	1923年9月1日集団鬼となった地で	白眞弓
10	この国を蝕み続ける利権の群れ	高坊	2	次決めず放り出したぞ無責任	一角
11	官僚の付度群れる霞が関	林	2	叩くほど強くなつてく労組員	白眞弓
12	群集の一人と言えど反戦者	亀公子	2	いよいよか安倍の通院始まった	高坊
12	半額のシール貼るころ人だから	広助	2	安倍さんのマスクが様になつてきた	ダン吉
13	群がればみな保菌者の顔に見え	広助	3	お粗末なモーリシャスへの小泉対応	高坊
◆自由吟 (互選) 一人5句以内吐 (投句13人／14人の互選)					
1	次の次狙う根性ないのかい	一角	3	皆死んでも黒い雨は降らないと	大峰
1	次々と旧悪残し退陣し	一角	3	広島を買ったつもりが化けて来た	大峰
1	ウイルスの逆襲身に覚えあり人類は	未知子	3	総太君 ほこ 戈と若さと 礼節さ	宏
1	終息を叫べない今共存に	広助	3	次は誰有象無象が俺という	一角
1	GOTOにコロナ時計が狂い出す	亀公子	4	町郊外マスク警察待機する	立東爺
1	コロナ禍とGOTOよりも医療介護	宏	4	列島は秋へ鉛筆尖らせる	ダン吉
1	香港の近い将来日本かな	高坊	4	安倍夫婦カワイ夫婦の「差異」は何	宏
			4	安倍の後アミダで決める自民党	広助

4	最近の檢察何かと目を見張る	高坊	6	血税を喰い物にするエセ議員	亀公子
4	GOTOで連れの家族をコロナ禍に	高坊	6	戦争と隣りあわせの日常へ	林
4	トラベルとトラブル混同してしまう	立東爺	6	次がない借金地獄抱えてる	一角
4	GNP 最悪下落 アベノミクス	宏	7	温泉街GOTOコロナがやって来た	立東爺
4	コロナでも横文字ソロソロもう分らん	北の山	7	基準値を変えてコロナを軽くみる	徹乗
4	天災人災地球汚して倍返し	大峰	7	コロナ盆夫婦二人の田の仕事	白眞弓
4	コロナ禍で炙り出されたリーダーの資質	未知子	7	居座って疑惑の山を積み上げる	亀公子
5	軍備よりコロナ医療とワクチンを	宏	7	黒い雨核の傘にて捨て置かれ	林
5	二〇年夏の思い出コロナの輪	立東爺	7	赤紙で命奪って英霊とは	北の山
5	GOTOで死線彷徨う旅勧め	林	7	八月になるとあなたの平和論	ダン吉
6	買収でない金ポッケにねじりこむ	徹乗	7	敗戦を終戦と呼び真実隠す	北の山
6	キャシュレス通帳にないローン増え	広助	7	フリーランス手足もがれて骸だけ	大峰
6	この暑さコロナの夏と刻む日々	立東爺	8	ヒト科のおごりコロナの目覚め温暖化	未知子
6	落下した蟬の言い分聞いている	ダン吉	8	思いやり教えてくれたコロナ禍よ	ダン吉
6	最長首相の刻む歴史はアベノマスク	徹乗	8	自動車を逆立ちにする大水害	広助
6	モーリシャス後回しにして靖国へ	高坊	9	金バッチコロナ尻目に夏期休暇	亀公子
6	国難に国会休む法治国	広助	9	敵基地へ攻撃辞さない五輪国	林

自選句

- 9 コロナ禍中人目忍んで墓参り
被災者の願い切り捨て黒い雨
11 安倍さんに尽くした夫婦檻の中
11 安倍さえも外すマスクは金の無駄
12 国政の私物化ふとどき三千日
13 黒い雨晴れ間与えぬ国の所作

未知子

北の山

徹乗

徹乗

林

亀公子

◆自選句 中野 林

布マスク国会閉めて姿消し
ポチ抱いてソファで昼寝の雲隠れ
仮病かと逃走癖かどちらもです
GO・TOで感染増やし秋を待つ
国民の命を餌にするGO・TO
ウソ政治止められませんか病気で
敵づくりいつか来た道追い求め
能無しのお坊ちゃまは戦好き

◆自選句 前田 大峰

逃げ廻り最後にドッグで恩に着せ
白いかと美顔クリーム塗りたくり
核の橋渡し晋三の足元疎んでいる

◆自選句 岩原 一角

勝ち馬に乗ってるだけのセコい方
政策は二の次三で野合して
ごほうびは大臣ポストおこぼれね
借金を返すあてなどないくせに

おたより

◆岩佐ダン吉さん（大阪）より

ある新聞（週刊）の選評を担当しています。《投稿規定》には「ハガキに川柳は3句まで」とありますが、数枚、数句はさら。詠んだ川柳を自分で3句まで選ぶのも川柳上達の大切な要素だと私は

思うのですが…。

◆遠田亀公子さんより（かほく市）

酷暑の毎日で体にこたえます。当然脳ミソも熱くなつてくたたくたに。政治も社会もいやな話題に辟易しています。

ほのぼの川柳

オスカメスカ分かなかつたが卵生む 神田 鯛
 捕つた虫リリースするよわが息子 神田 鯛
 夏が好き汗が涙を隠すから 寿賀子
 ああ暑い庭でバナナ植えよかな 未知子
 ウイルスの正体探り目がテンに 東 爺
 行かなくちや馴染みの店にマスクして 東 爺

立入川柳

（言葉を織り込む）

意志かわりとうとう今日は和やかに

（石川 東京 名古屋）

辻寿賀子作（東京）

『戦争前夜抄』

20

あまがす
甘粕事件。

大杉栄、伊藤野依^{のえ}、宗一殺害の様子

周 立東爺

前月会報では、1923年9月1日に起きた関東大震災の時の朝鮮人虐殺の状況を淡々と記録した瀬戸内寂聴氏の『余白の春』から抜粋した。

「朝鮮人虐殺はなかった」と主張する右翼や小池都知事のメッセージ拒否や体制擁護論客の主張が破綻しているのはあきらかである。

今回も『余白の春』からの抜粋。甘粕正彦（憲兵大尉）が実行犯となった甘粕事件の現場になった亀戸署の状況からのつづきである。

（以下、文庫21頁より）



大杉 栄（愛媛県丸亀生れ）
1885.1.17～1923.9.16（38）

九月十六日の朝、九時頃、大杉と野枝は揃って洋服姿でつれ立って外出するのが近所の人の目を見ていた。大杉は鶴見に住んでいる弟の勇一家を見舞いにいったのだった。そこにはたまたま、アメリカへ嫁いでいた大杉の妹の橘あやめが、一人息子の宗一（注…米国籍）をつれて帰国して身を寄せていた。一家もあやめ親子も無事だったのを喜び、大杉は東京に行きたがる宗一少年をつれてその日の夕方帰ってきた。

三人が家の近くについた時はもう六時すぎになっていた。

野枝は家に入る前に、家の前の八百屋に立ちより、子供たちに梨を買った。

八百屋を

出ようとした時、それまで待機していた憲兵曹長の森慶治郎に呼びとめられた。

「小泉司令官が至急あなたにお会いして相談したいことがあるそうです」

という。大杉が一度家へ戻ってから出直そうという、森はさえぎっていった。

「いえ、司令官が大変急いでいられますので、奥さんも御子さんも御一緒にちよつと」

そのまま、三人は麴町の憲兵隊に連行されていた。そこには甘粕正彦大尉が待機していた。

三人は憲兵隊の二階に案内され、野枝と宗一は憲兵隊長室の控えの部屋に通され、大杉ひとりは隊長専用の応接室につれていかれた。大杉はその部屋で、背後からいきなり甘粕大尉に柔道の手で首を締めあげられ殺された。大杉は大した抵抗もせず一言も発しないで絶命した。

そのあと甘粕は階下の事務室で森曹長と悠々と

コップ酒でウイスキーをあおり、三十分ばかりして腰をあげると、大きく伸びをして、「さあ、今度はあの女をやっつけに行くか、みんなついてこい！」と大声でいい、先に立って二階へ上っていった。

二人を殺す方法はくわしく計画をたて、甘粕大尉が森曹長以下平井、鴨志田、本多の三人の部下に説明し、命令してあった。

野枝は控え室で宗一とふたり窓から月をながめていた。家の前で森曹長に声をかけられたのはまだ六時すぎだったが、もうその時は九時をまわっていた。大杉はどこかにつれ去られたまま一向に帰って来ない。こんなことなら、やはり、あの時、一旦家へ帰って、魔子たちに顔をみせておくのだった。いや、大杉だけに用があるなら、自分と宗一は帰っていれば



よかったのだ。宗一はもう野枝にもたれて半分眠りかけていた。

そこへ森曹長が入ってきた。

「奥さん、ちよつとお聞きしたいことがあるんだが、隣室までご足労ねがえませんか」

笑顔で愛想よく話しかけながら、野枝の膝から宗一を軽々と抱きあげると、窓ぎわから空を指さしてあやすようにいう。

「ほら坊や、お星さまがたくさんだろ、あの大きい星は、なんていう名の星だか知ってるかい」

そうしながら、ついてきた鴨志田、本多の二上等兵にさりげなく宗一を手渡した。

野枝は森にうながされて隣の隊長室に入っていた。廊下のドアを背にして椅子がおかれている。野枝をそこへ坐らせるや否や、急に森曹長はこれまでと打って変った態度になり、いきなり居丈高にどな

りつけた。

「あんたは女のくせに無政府主義なんかを騒ぎたてて、けしからんやつだ」

野枝の注意を森ひとりに集中させるための予定の演技だった。野枝は大胆に前の卓に右肘をつき、頬杖をついて、ふんといった表情で森を睨みかえした。どうせ、こういうところへ連行された以上、何かがおこるとは考えていたし、むやみに待たされている間にもあれこれ想像していたので、それぐらいのことでは愕きも脅えもしない。

廊下で内部の様子をうかがっていた甘粕大尉が、野枝の背後からドアをあけ、人ってきた。そこできなり背後から首に腕を廻すというのが、大杉の時と同じ手口の計画だった。野枝が頬杖をついているので締め難い。計画に齟齬を来した甘粕は、ゆっくり部屋を歩きながら野枝に訊問とも対話ともつかない調子で話しかけた。

「おまえたちからみれば、たかが地震や火事ぐらいで戒厳令が布かれて大騒ぎしているなどということは、さぞ馬鹿げていると思ってるだろうな」

野枝は相変らず小馬鹿にした薄笑いの表情でじろじろ甘粕を見るだけで返事もしない。

「おまえたちは新聞雑誌に名前が出るえらい主義者の先生だからわれわれのような野暮な軍人なんか、馬鹿にみえてしょうがないだろう」

「でも今日び、世間じゃ、兵隊さんでなければ夜も日もあけないようにいうじゃありませんか。あたしたちが馬鹿にするもしないでもないでしょうよ」

野枝の答えはあくまで皮肉たっぷりでその表情は嘲笑的だった。甘粕はそんな野枝のまわりをまわりながら一番締めやすい位置を探していた。

「おまえたちは、朝から晩まで尾行されて、警察ぐらい、いやなものはないと思ってるだろう」

野枝はやはり白眼でじろっと甘粕を見返しただけで返事もしない。

「その警察と同じような仕事をして、しかも兵隊なのだから、おまえたちにしてみたら、われわれはこの世の中で一番いやな、憎らしい存在なんだろうな」

これにも野枝は返事をしなかった。いったいこの男は何を言いたいのか。大杉はどこでどんな訊問を受けているのか。甘粕のねちねちしたことばはまだつづく。

「おまえたちは、今のような混乱がいつまでも続くように願っているのだろう。正直にいえ。混乱すればするほど、おまえたち主義者にとっては好都合なんだからな」

野枝は甘粕の顔をまじまじと見つめてうるさそうにいった。

「あなたたちと、わたしたちとは考え方が根本からちがうんだから、しかたがないでしょう」

「なにつ、考え方がちがうだと」

甘粕はきつかけをつかんだように野枝の方にいつ

そう近づいてその横に迫った。

「おまえたちは世間を混乱させて、それを原稿に書いて食っている火事場泥棒みたいなやつだ。こんどの震災騒ぎも、どうせ原稿にして儲けるつもりだろう。そうですと、正直にいったらどうだ」

「そうですね……」

野枝はそれまで押えに押えていた怒りが爆発したように、ふいに全身を震わせると、はじめて頬杖を外し、拳を握って甘粕の方に振りまわすようにして叫んだ。

「よけいな心配はもうたくさん。そういえば、あっちこっちの出版社から、大杉に、震災の感想をぜひ書いてくれって催促にきてましたっけね」

その瞬間、甘粕の腕が野枝の首に毒蛇のようにのびしっかりと巻きついてた。野枝は激しく抵抗して甘粕の手首をかきむしりながら、うつつうつつと呻きながら全身でもがいた。思いがけない強い抵抗だった。大杉をいきなり背後から締め殺した時の方

がうまくいった。森が部屋の外へとびだして、ドアの前で見張りをした。

隣の部屋では宗一が鴨志田と本多の二人にあやされながら、何も知らず野枝を待っていたが、隣室から、呻き声と、どたばたという異様な物音が聞えてきたので、男たちの手をすりぬけて隣室との境のドアに駆けよった。小さな拳で力まかせにドアを叩きながら叫んだ。

「おばちゃん！ おばちゃん！」

そのか細い首に、いきなりたくましい男の腕が巻きつけられ、もがく宗一の両手はもうひとりの男の手によつて、しっかりと押えつけられていた。

宗一が一ことも発しないまま小鳥が殺されるような他愛なさで絶命した時、隣室もすでにひっそりと静かになっていた。

彼等の遺体は、全身細帯でぐるぐる巻きにされた上、セメント詰めになっていたので、誰が誰やらわ

からなかったといわれている。

甘粕は逮捕され、九月二十日軍法会議に付されたが、九月二十四日付で、陸軍当局は次のような発表をした。

「……右犯行の動機は——略——平素より社会主義者の行動を国家に有害なりと思惟しおりたる折柄、今回の大震災に際し、無政府主義者の巨頭たる大杉栄らが震災後、秩序いまだ整わざるに乘じ、如何なる不逞行為に出づるやも計り難きを憂い、自ら国家の害毒を花除せんとしたるに在るものの如し」

震災という突発的な天災が単なる天災としての被害だけでなく、人間の中に秘められたあらゆる悪魔を呼び覚まし乱舞させ、恐怖と汚辱と血にまみれた地獄をこの世に招いたことはこれだけの例でもまだ氷山の一角でしかなかった。

しかもそれらはことごとく、政府と軍部の陰謀、警察力を動員してつくられ、招きよせられたこの世の地獄であつたのだ。

(つづく)

シベリア抑留の記録

秋山茂さんのシベリア抑留記が前月、21回の連載で終わりました。読者の方から感想も届いています。

当時9歳、旧満州の奉天にてお母さんと一緒に引きあげられた秋山さんの長女・坂本富沙子さんから、当時の様子やお父さんの思い出が届いていますので紹介します。

消えない影像

父の思い出、満州からの引き揚げ

坂本 富沙子（84歳）

幼い頃から父が好きでした。私が誰とでもすぐ仲良くなれるのは、この父のおおらかな性格を受け継いでいると思っています。生涯、私の理想の男性像でもありました。

私の満州での幼い記憶の中では、父が転勤するた

びに、いつも若い兵隊が来て、木を割って薪をこしらえたり、かまどでごはんを炊いたりしてくれました。

日中戦争が激しくなり、満州の原野に次々と匪賊（注1）が出没。その討伐隊長（注2）として、西へ東へと移動して追いかけまわり、母子家庭状態だったのです。

その頃の父はひげをはやし、軍服を着て勲章をつけ、長い軍刀を腰に差し、白手袋をはめ実にりりしい姿でした。

めったに家にはいない父でしたが、いる時は穏やかな人でした。公園での冬は、スケートリンクをあつと言う間に作ってくれたり、手を取って教えてくれたり、参観日にはりりしい姿でドンと後方の真ん中で観てくれるのがすごく誇らしく嬉しかった私でした。

父がシベリアに連れて行かれた二十一年の夜、母が私を起こして、「とおちゃんがなくなつたの。明日からしっかりしていこうね」と泣きながら私に抱きついてきました。私は「頼りない母だな。私がしっかりしなくては」と思い、その後の私の生きる指針となりました。

そんな「頼りない母」でしたが、父が後に、「四人の子どもを無事に日本まで連れてきてくれた」と、母にすごく感謝していたことを知って、その愛の深さを知ったのでした。

私達が八月十三日、奉天から帰還する日、「次の夜海林を發つ列車が最後の日本行きだ」と駅員に聞きました。

海林（奉天から東へ六百キロ、牡丹江郊外）には叔母（母の妹）が住んでいました。列車が海林に停まった時、叔母も一緒に帰ろうと、一時下車すると

言った時、日本国軍人の隊長夫人が、「そんな勝手な事は許しませんよ！」と金切り声で叫ぶのを聞いた母は、「何を言ってるんです。あなたの世話になんてなりませんから」と大声を出し、列車から飛び下り、堂々と妹の家へ寄りました。いつもなナヨナヨしていた母の強い一面を見ました。

叔母のご主人も日本陸軍に入隊、一切連絡なしで不安だった叔母は、姉の訪問で、一も二もなく日本へ帰ることを決め、米を炊き、炊きあがりの熱々^{あつあつ}を六本ほど新品の軍足にぎゅうぎゅうに詰め、リュックに入れ、すぐ列車に戻り、出発しました。

その海林では直後に大きな暴動が起き、「日本人は皆やられた」と聞かされました。叔母親子は私達を恩人と氣遣つてくれ、その後帰国してからも助けてくれました。

戦争で一番怖いことは、人間が瞬時にして冷血動

物になってしまうことです。僅か九歳の私が人間の冷酷さを目の当たりにして、その影像が今日も尚決して消えてくれない、悲しさと苦しさです。戦争で一番傷みつけられるのは弱者です。それが老人、幼児だと言う事を目のあたりにしました。

日本へ向かう無蓋の貨物列車、真つ暗の曠野で転覆事故にありました。後から真つ暗な中を走ってきた列車に衝突され、貨車最後尾の人は全員死亡でした。三輦目にいた私達の列車内も大混乱で離ればなれになりましたが、お互いに見つけることが出来ませんでした。

曠野の中に薪が積まれ、ゴーつと火がつけられ、勢いよくなった時、大人たちが「いっち、にい、さ〜ん！」と大声を出し、事故で亡くなった人がパーつと火の中に放り込まれました。次から次とあちらでもこちらでも人が薪のように投げ込まれるの

です。

なんの感情もない雰囲気圧倒され、私は恐ろしさで、残った列車の中に入りました。体中がふるえてしばらくはものが言えませんでした。

数時間待たされ、やっと汽笛が鳴り、動きそうになった時、線路脇の斜面の下で動くものがありました。

「何だろう」と目をこらすと三歳か五歳くらいの丸坊主の幼児が何人も線路の方に向かって、草に繋がりながら登ってこようとしているのです。「この子たちの親は？」と見渡しても誰もいません。咄嗟とつさにはどうなっているか分かりませんが、「ゴトン」と列車が動き出したとたん、幼児達は立ち止まり、窓から顔を出している私たちに無心に手を振っているのです。それを見た時、初めてこの児達が置き捨てられたのだと分かりました。

どうにもしてやれない自分が口惜しく、「この児

たち、明日は生きていられるのだろうか？ 今夜はどうするのだろうか？」と思うだけで涙がポロポロこぼれてきて、どうしようもありませんでした。そのとき以来、その光景が、私の脳裡にずっと染みついて離れず、戦争と聞くと七十五年も経っているのに消えない影像として残り、悲しみと怒りが再び襲ってきます。

(つづく)

【注1…匪賊】 19世紀以降、中国の中央政権は清から中華民国へと交替したが、統治力は地方までは及ばず、地方ではさまざまな武装集団が出現した。騎馬を中心にした「馬賊」や盗賊集団もあり、反体制的・反社会的なものが「匪賊」と呼ばれた。中には日本の侵略に反発してゲリラ活動を繰り広げる武装組織も相当数含まれていたとされる。

【注2…討伐】 満州国軍は、多くの民族で構成され、「国内の治安維持」「国境周辺・河川領海の警備」

を主任務とし、事実上関東軍の支配下で関東軍の後方支援部隊、国境警備隊、沿岸警備隊、治安部隊としての性格が強かった。1944年、鉄道警護隊が編入されて鉄道警護軍に改称され、秋山さんは、満州国軍鉄路警護兵上尉で鉄道沿線の警護をしていた。(【注】は編集子)

※なお、忘れてならないのは満蒙開拓団の事。1936年(昭和11年)、二・二六事件で政治の実権は政党から軍部に移り、昭和恐慌で疲弊する内地農村を中国大陆への移民で救済するとして、関東軍が「満州農業移民百万戸移住計画」を策定。これを元に国策化され満蒙開拓団が呼びかけられた。全国から三十二万人が大陸へ渡った。石川県からも白山郷開拓団のように多数の開拓団が満州に入植した。敗戦の混乱で犠牲となった県内約三千人を慰霊する碑が野田山墓地の一画にある。(編集子)

編集後記を兼ねて

▼9月14日は鶴
彬の命日。卯辰

山玉兎ヶ丘「鶴彬句碑」の清掃を予定。▼高
松では前日の13日（日）、法要、碑前祭が計
画されている（添付資料参照）。▼9月11日
は川柳中興の祖・井上剣花坊の命日。「東京
川柳会」と「川柳人社」が共催で記念誌上川
柳大会を計画（同封チラシ参照）。▼突然の
安倍総理の退陣表明。「嘘、強弁、言い逃れ、
誤魔化し、隠蔽、改ざん等を日々重ねてい
ては、心が病んでいくのは当たり前。ストレ

9月例会ご案内（毎月第4木曜日）

- ◆例会 9月24日（木） ◆投稿×切：21日（月）
- ◆課題「前」 3句以内 ◆自由吟：5句以内
- ◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論などもよろしく。
- ◆コロナ禍でなかなか集まれなかったのが実情でした。
今回なんとか顔合わせしたいと思います。pm7時。
- 投稿 FAX(076) 254-0762
- メールアドレスは下段に。

郵送は
下段住所へ。

スを自分の中に呼び込んで溜め込んでき
たのは彼自身」とは高野孟氏の論評。▼
アベ以外は誰でもいいというお方もいた
が、本命スガは安倍政治を継承するし、
他の候補者も国難を解決出来るとは思え
ない。▼石破氏の所属は「日本会議国会
議員懇談会（相談役）」「みんなで靖国神
社に参拝する国会議員の会」で、核保有
論者として有名。「市民デモはテロ行為
だ」とも言った右派強権派。▼野党に頑
張ってもらうしかない。（周立東爺）

「和川柳社」会報
会員募集しています！

同人：4000 円/年
投句/購読：2000 円/年
★会報の他に、関連資料など
もお送りします。

和川柳社 〒920-0335 金沢市金石東2丁目15-30（渡辺 寛）

電話 FAX：076-254-0762 PC-mail：kananabe@popolo.org

携帯：090-9445-1302 携帯 mail：kan-wata@i.softbank.jp

振込先：北國銀行中央市場支店 #191 普通 640 「和川柳社」

発送に協力いただいています。

▼《食育のグリーンノート&土の音工房》《オカリナ制作》・上村彰